

## 遥かな町まで、ぼくたちを )

近江を鳥瞰する名所案内のリアリティ

阿 部 安 成

**railroad 1**

ここでは、わたしたちのみぢかにあって手にする機会がしばしばあるものの、しかし、見終わったり使い終わったりしたあとにはかたんに捨てられてしまえばあいが多い、リーフレットやパンフレットなどのたぐい(ここではひとまとめにリーフレットとよぶ)を素材として、観光や行楽のために、紙によるメディアを用いて、ある場所を案内するときの表現方法についてみることにします。

この会場に展示されたリーフレット 14 点の一覧を示しましょう([ ]内は推定制作年、/は改行をあらわす。彦根商工会議所事業委員会編『近江鉄道コレクションブック』国宝・彦根城築城 400 年祭実行委員会、2007 年、に収録されたリーフレットに\*をつけた)。

大正 4 (1915) 年 (表)「近江鉄道湖東御案内図」(裏)「近江鉄道沿道及院線と諸国の関係」\*

大正 15 (1926) 年 (表)「琵琶湖遊覧御案内」(裏)「琵琶湖名所鳥瞰図」\*

大正 15 (1926) 年 (表)「比叡山」(裏)「比叡山名所遊覧交通鳥瞰図絵」\*

---

)本稿は、湖東定住自立圏地域創造事業「秋の一日まるごと中山道！ / 中山道ウォーク & 湖東ふるさと塾」(2010 年 9 月 26 日、高宮地域文化センター、主催彦根青年会議所)での湖東まち講座「近江鉄道の時代 明治～昭和の沿線絵地図を読みとく」の報告原稿である。

[昭和13(1938)年](表)「沿線/名勝/案内/近江鉄道」(裏)タイトルなし

[昭和15(1940)年](表)「沿線/名勝/案内/近江電車」(裏)タイトルなし

[昭和17(1942)年](表)「沿線/御案内/八日市鉄道/永源寺自動車」(裏)

[昭和19(1944)年](表)「もみぢの/永源寺/近江八幡/のりかへ/八日市鉄道/  
永源寺自動車」(裏)タイトルなし

[昭和25(1950)年](表)「沿線/名勝/案内/近江鉄道」(裏)タイトルなし

[昭和30(1955)年](表)「沿線/名勝/案内/近江鉄道株式会社」(裏)タイトルなし

[昭和35(1960)年](表)「沿線案内/近江鉄道」(裏)タイトルなし

[昭和38(1963)年](表)「沿線案内/近江/鉄道」(裏)「近江鉄道沿線観光案内」(縦長)

[昭和38(1963)年](表)「近江鉄道沿線観光案内」(裏)「沿線案内図」(横長)

[昭和40(1965)年](表)「沿線案内/近江鉄道」(裏)「近江鉄道沿線観光案内」

平成19(2007)年(表)「近江鉄道沿線ガイド/AKIN-DO/あきんどう/近江鉄道」(裏)タイトルなし

～ には、当代の広重として知られた(「<sup>マ</sup>popularly known as the “Hiroshige” of Present age」)と宣伝された吉田初三郎による鳥瞰図が印刷されています。ここにあげた14点のリーフレットのなかでは、この3点にもっとも稠密に、濃密に、鳥の目で眺めたという光景が描き込まれています。

<i>railroad 2</i>
-------------------

きょうこの会場で配布した『近江鉄道コレクションブック』が発行されたのは、彦根城築城 400 年祭が開かれた 2007 年のことでした。彦根で、この地に城が建造されたことを記念するときに、1 つに、初三郎の鳥瞰図などが用いられて、その歴史が回顧されたのです。このように、都市や町の出来事を記念するとき、その歴史がふりかえられるときに、しばしば初三郎の鳥瞰図が引っ張り出されます。

地元の観光を知ろうとするとき、それを考えようとするときにも、初三郎の鳥瞰図は格好の素材となります。たとえば、神奈川県立歴史博物館が、「特別展 ようこそかながわへ 20 世紀前半の観光文化」を開催したときに初三郎の鳥瞰図が展示され、特別展と同名の展示図録の 1 番めに、その鳥瞰図が掲載されています（神奈川県立歴史博物館編『特別展 ようこそかながわへ 20 世紀前半の観光文化』神奈川県立歴史博物館、2007 年）。

1 つの都市や町をこえたもっと広い領域を対象とした地図帳の装丁にも、初三郎の鳥瞰図が使われています。たとえば、新潮旅ムックの『日本鉄道旅行地図帳 歴史編成』のなかの「朝鮮 台湾」と「満洲 樺太」のそれぞれの表紙に、初三郎の鳥瞰図をデザインした図柄が用いられています（新潮社、どちらも 2009 年）。初三郎は、日本の国内や「内地」にとどまらず、「外地」も外国も描いていたのです。もちろん、こうした鳥瞰図のいわば膨張は、19 世紀末から 20 世紀前期にかけての帝国日本の対外伸張と深くかかわっています。名所や名勝、史蹟や旧蹟に鉄道を延ばす、あるいは、鉄道が敷かれることによって新しい行楽地ができるといい得るとおり、新時代の観光は鉄道と切り離せない関係にありました。国境線が延び、航路ができ、さらに鉄道が開設されることによって、かつての日本人にと

ってのの観光地や行楽先は外地や外国にまで到達し、すでに 20 世紀初頭には、多くの日本人がアジア諸地域に出かけ、旅行先の新規拡大が、19 世紀末から 20 世紀前期にかけての時代の勢いとなりました。

きょうは、近江鉄道が開業した 19 世紀末から世紀転換期を経た 20 世紀前期、そして第二次世界大戦後から現代までの、近江鉄道沿線の案内などをみながら、観光や行楽の 1 つの仕組みをみてゆきましょう。

*railroad* 3 さて、吉田初三郎の鳥瞰図とは、いったいなんでしょうか。この鳥瞰図は、折り畳みができて、ポケットや鞆にかんたんに入れられる大きさの紙に印刷されていました。懐中して持ち運べる各地の名所案内などは、初三郎の鳥瞰図が登場するよりもまえからつくられていた古くからの型を踏襲しています。さほど高価なものではなく、無料で提供されたこともあったでしょう。紙でできたメディアですから、くりかえし畳んだり開いたりすれば、また水にぬれても、破れたり崩れたりしてしまう、とても簡便に扱えるものの、一方で、使い捨てのガイド・リーフレットだったといえます。つくられた当時は、博物館や美術館での展示を意図することなく、旅行者にとって便利で有用な、一方、鉄道会社や行楽地の商売人にとっては客を引き寄せる魅力ある印刷物となることを期待された、そして使い終われば捨てられ、また新しい版がつけられるメディアだったということです。

初三郎の鳥瞰図をみましょう。いずれも彩り豊かな印刷がほどこされています。鳥瞰の言葉であらわされているとおり、鳥の目で眺めたかのような、上空から見下した景色が描

かれています。ここには、普段の生活においては、また特に高い山にでも登らないかぎりひとが取り得ない視野の広がりがあります。この極彩色と俯瞰の視角が、初三郎の鳥瞰図にあります。ただそれだけであれば、初三郎以前の屏風（たとえば、洛中洛外図屏風）などにもすでにあった技法のくりかえしになります。初三郎の鳥瞰図が人びとをひきつけた魅力は、対象を描く構図のその妙にありました。

*railroad 4*

それではまず、1 つひとつ初三郎の鳥瞰図をみてゆきましょう。

彦根から貴生川と多賀への近江鉄道を中心に描いた は、初三郎の初期の作品であり、彩りにしても鳥瞰する構図にしても、その巧みさがまだ充分に開花していないとみえるでしょう。近江鉄道沿線では、「石田三成の旧城址」の佐和山、神社仏閣、病院に学校に工場が「名所地」として紹介されていて、いまのわたしたちの感覚からするといくらかずれた名所案内になるかもしれません。これがつくられた 1910 年代には、まだまだ、病院、学校、工場はかぎられた場所にしかない珍しい施設であり建造物だったのでしょう。このときはまだ、滋賀大学経済学部の母体となる彦根高等商業学校はなく、したがって、当然のこと、それはこの鳥瞰図には登場しません。

彦根では「近江鉄道株式会社」がひととき大きく描かれ、高宮では「能庄旅館」「円照寺」「大鳥居」「高宮神社」がみえます。鉄道から離れたところでの、「近江随一の松茸」がある喜楽山や、「日本一紅葉の名所」としての永源寺こそが、この地域でひとを集められる行楽地ということなのでしょう。

では、この鳥瞰図のおもしろさはどこにあるのでしょうか。それは、1 つにこの絵図の縁

に、もう1つは備考欄の詞書きにあります。画面の左の縁には、米原駅を連絡駅として東海道線と北陸線につながるようすが、また、右の縁には、貴生川を経て柘植と草津でつながる院線（鉄道院が管理する線。いまのJR）が京都、大阪、神戸、奈良、さらには、「伊勢大神」の山田へとつながっている路線図が、縁の余白に記されています。これがタイトルにある「諸国の関係」の記号による表現となります。鳥瞰図といっても、その視野が360度に広がっているわけではありません（もっとも初三郎には視界360度の鳥瞰図もあるのですが、それはここではおきます）。この画面では近江鉄道沿線を描きながら、琵琶湖がほとんど描かれていません。実際に近江鉄道は、琵琶湖のほとりを走るわけではないので、その現実のとおりがあらわされているともいえませんが、近江鉄道沿線の行楽地や名所を案内するのに、永源寺までを視野にいれるのであれば、近江八幡や安土も描いてよいでしょうに、それはおこなわれていません。

鳥瞰図にも限界があるわけです。それを補うように、近江鉄道沿線をより広い視野のなかであらわすときに、図の縁の余白が活用されて、都市やほかの行楽地との位置関係がわかるようにあらわされているのです。「多賀神社」の参拝と「伊勢大神」への参宮は深くつながっているわけですから、両者の位置をおおまかにではあれ、この1枚の画面のなかに表示して、多賀にいったら近江鉄道を使って伊勢へ、伊勢へいったひとは近江鉄道に乗って多賀へ、と促されているのです。縁をただの余白にとどめずに活用する、これが初三郎の鳥瞰図の重要な意味のある個性になっています。

もう1つ、画面左上端の備考には、つぎの詞書きがあります 「画面は総て春の気分

を現すと云へど、夏の新緑、秋の紅葉、さては伊吹山頭に白雪を頂く冬またなかなか捨  
てがたき眺なり」 描かれたこの景色は、春の近江鉄道沿線だということです。航空写  
真が現実の一瞬を切り取るように、この鳥瞰図にも1つの季節の風景がある、そのうえで、  
夏の新緑、秋の紅葉、冬の積雪もあらかし、そうした季節もこの地でよい行楽がおこなえ  
ると宣伝しているのです。確かに、緑の色があちこちに塗られていますし、さすが「日本  
一紅葉の名所」と讃えられる永源寺には、鮮やかな紅がみえ、伊吹山の頂はほかの山々と  
ちがって白くなっているようにみえます。湖上の帆船も夏の印象でしょうか。四季それぞ  
れの行楽がこの1枚の画面にたっぴりと詰め合わされているわけです。初三郎の鳥瞰図に  
は、複数の時間が流れています。これはいいかえると、非現実がまるで現実であるかのよ  
うに表現されていることとなります。

この鳥瞰図は、初三郎の代表作というほどの評価は与えず、素朴な未熟な作品として  
しかかえりみられないかもしれません。しかしここには、彼の鳥瞰図の大きな、重要な特  
徴である、縁の活用と非現実の表現とがあるのです。

railroad 5 つぎに、 をみましょう。琵琶湖と比叡山の名所を鳥瞰であら  
わしたリーフレットです。 <sup>たいこ</sup>は太湖汽船が初三郎の経営する観光社に発注した名所案内で  
す。鳥瞰図のなかにも「太湖汽船株式会社」がひときわおおきく描かれていますし、その  
反対の面には「湖上より見たる本社全景」の写真があります。同社の宣伝文では、「御家族  
連れの御行楽に、御招客に、運動会等の御催しには、是非共、世界の公園、日本のスイス  
と讃へられる琵琶湖へ御来遊を御願致します」と人びとを誘う。ここでは文章で、春夏秋

冬それぞれの「明媚」と「秀麗」がうたわれています。

初三郎の鳥瞰図の多くには、「絵に添へて一筆」と題された文章がついています。のそれはつぎのとおり。

富士と琵琶湖、そは世界に対して、我等日本人が優美を誇る象徴の双壁であらねばならぬ。予曾つて鉄道省より発行の、鉄道旅行案内装幀並に挿画執筆に当り、洵く全国に写生旅行を試みたるも、未だ琵琶湖の如く、交通至便にして風光美の雄大なるを見ず。今や本図刻成る。ノ幸ひに諸氏が遊覧の榮ともならば幸甚のみ。

ここにあるとおり、初三郎はただ机上での想像によって鳥の目による光景をイメージしているのではなく、ときに「旅行」による「写生」にもとづいて、いいかえると現地を実際にみたうえで、その地の鳥瞰図を描いているのです。そうした作業を経て彼は、現在ならばグローバルと表現されるような「世界」を意識して、「我等日本人が優美を誇る象徴の双壁」としての富士山と琵琶湖をあげています。世界のなかの日本、世界に誇る富士山と琵琶湖、そして、世界に優美を誇る日本人という自覚の勧めがここに登場しています。

琵琶湖の名所として、「大崎の絶勝」「竹生島」「多景島」「浮御堂」、そして「唐橋」「石山寺」や「近江富士」の三上山が示されるなか、「伊崎さをとび」といった細かな場所も落とすことなく描かれています。琵琶湖が中心ですから、この画面に近江鉄道は登場しません。かわって煙を吐き、赤い線の「TOKAIDO LINE」を走る汽車がみえます。汽車よりも湖上の「みどり丸」と「竹生島丸」がもっと大きく描かれているのは、やはり太湖汽船が発注した鳥瞰図だからです。初三郎の鳥瞰図のなかでは、みせたいものが自在に強調さ



れて過剰なほどに大きくあらわされています。

railroad 6 から 11 年を経たところで、鳥瞰図での初三郎の技法はどのようなになったでしょうか。ひと目でわかるとおり、彩色と構図がともに見違えるほどに変化しています。その技法の開花、初三郎鳥瞰図の躍動をみるものを感じさせます。ここでも縁に着目してみましょう。琵琶湖を中心としてその両端はおおきく湾曲させられ、左の縁には、京都、大阪、和歌山、下関、門司までが、鳥瞰図をみる視界のなかにおさめられ、そのうえさらに、「朝鮮」と「上海」までもが遠望されているのです。右の縁には、敦賀 直江津 青森をつなぐ線が 型に曲がり、すこしあいだをあけて函館 北海道、そして「樺太」へとその線は到ります。

左右の縁の上部で、朝鮮、上海、北海道、樺太をこの画面に入れ込む一方で、縁の下部には、雲を配して、つまり途中に省略があることを示したうえで、外宮、内宮へ（左）、東海道から東京まで（右）へとみえるようになっています。もういちどべつにあらわすと、中央に琵琶湖、その左に東シナ海、右に日本海があって、それぞれのさきに朝鮮、上海、北海道、樺太があり、手前には左に伊勢神宮、右に東京、そして三上山と富士山も描かれるという左右の配置を按配よく描いた構図がここにはあります。ただし、富士山よりは近江富士のほうが大きくみえるようになっています。それもまた、琵琶湖案内ゆえということでしょう。

ひとの目では、視点の高さにしても視角の広がりにおいても限界があります。鳥の目はそれをこえた高い視点を得ています。視角の広がりという点では、実際にそれがどのくら

いなのかはわかりませんが、でもわれわれとは目の位置が違いますから、おそらく鳥は、より広い視野をもっているのでしょう。そうした鳥の目によってある場所を一望してみようとするとき、初三郎は現実の世界のほうをこそ強度に湾曲させて1つの画面のなかに押し込んだのです。さらに、ひとの目よりも鳥の目よりもいっそう強力な視力によって、遙か遠くまで展望したのです。

railroad 7 奥に比良と比叡の山々がみえる構図で琵琶湖を描いたとき、遙かむこうに上海や樺太を入れてしまえば、それは確実にフィクションとなります。いまどきの子どもですら、そうした嘘を絵にしないでしょ。もちろん、伊勢神宮も東京も実際にみえるはずがありません。こうした虚構の構図は もおなじで、そこにも、「釜山」「樺太」「東京」があります。では、近江鉄道を使って多賀参りをしたならば、こんどは近江鉄道と院線を使って伊勢までいけると、あくまで主は多賀、そしておまけとして余白に伊勢が記されていました。それにくらべると では、まるで日本の内地と外地とが、日本と外国とが自然と連続するように、湾曲された鳥瞰図の構図のなかに描かれています。みえるはずのない場所を遠くに展望することはフィクションなのですが、しかし、釜山や朝鮮や樺太の南半分はこの1926年の時点では、すでに日本になっていたという現実がふまえられています。現実<sup>に</sup>立脚して、いくつかの特定の名所や名勝を案内するための絵図が描かれるとき、それを巧みに表現しようとして選ばれた構図が鳥瞰という視界であり、そこにはいわば、縁取り<sup>の</sup>豊かな、捻じ曲げられた非現実の世界が展開したのです。

確かに初三郎の鳥瞰図では、日本列島も朝鮮半島も捻じ曲げられています。この動詞は、

スプーンを捻じ曲げる、事実を捻じ曲げる、という用例があるとおり、なにか奇怪で怪しげな、望んでいない、好ましくない事態をあらわしています。しかし、初三郎の鳥瞰図は、事実と異なるという理由で拒絶されたことは、まずないといってよいでしょう。むしろ 20 世紀中葉の戦時下においては、この鳥瞰図は地図とうけとめられて検閲の対象になったこともありました。重要な地図情報を敵に渡すなということです。こうした初三郎鳥瞰図の構図は、決して否定すべき嘘なのではなく、この非現実、虚構の画法がかえって観光や行楽の勧めや案内として好まれたのです。

railroad 8

では、初三郎の鳥瞰図のなかには、なにがあったのでしょうか。

彼の鳥瞰図は、もちろん、のっぺりとした平板な平面図ではありません。また、遠近法を採り入れた風景画とも異なりますし、おもうに、3D の画像とも違う技巧を駆使した絵図といってよいでしょう。初三郎鳥瞰図の妙 不思議と巧みな美しさは、曲線の使い方にある、とわたしはおもいます。これはさきに述べた、捻じ曲げる、ともかかわっています。初三郎が自由に曲線を使いこなす様相は、それがもっとも極まると、さきにすこしふれた 360 度を一気に見渡し、真上から円として対象の風景を描いてしまうことに到ります。初三郎は、比叡山を画面の中心におき、しかもその超上空からそこを見下ろした鳥瞰図を描いています(「叡山頂上一目八方鳥瞰図」。住友和子編集室ほか編『鳥瞰図絵師の眼』INAX 出版、2001 年、収載)。

曲線を駆使し、対象を捻じ曲げて描く表現には、遠近感や立体感にとどまらない、現実を構成する妙というべき巧みがあります。ここにいう「巧み」には、考え、手立て、企て、

企み、といった意味がふくまれています。遠近法や 3D による画像は、それらしさ、ほんとうらしさ、みたまま、あるがまま、といったようすを想像させるかもしれません。それにくらべると、初三郎鳥瞰図は、あくまでフィクションであり、しかし、そこには現実を構成する つくりだす、創造する、目のまえのある風景をなにかべつなかたちにしつらえてみせる そうした、初三郎による、時代や社会や自身への考察や、それらをうまく表現する企図や、現実をとらえてみせようと狙う深謀があったようにおもいます。

この意味で、初三郎の鳥瞰図は、20 世紀前期における帝国日本の自画像だといえるでしょう。

*railroad* 9 初三郎以外のものによって描かれた名所案内は、どのようなデザインや構図となったのでしょうか。おおまかにいうと、たくさんの擬似初三郎鳥瞰図、垂流初三郎鳥瞰図がつくられてゆきます。もちろん近代の名所鳥瞰図の元祖あるいは本家が初三郎だとすれば、それにくらべると後追いのものまねは、いずれも見劣りがします。しかし、写真や印刷の技術の発達によってすべて写真で案内リーフレットをつくってよさそうな現代になっても、なかなかイラストレーションなどの描かれた鳥瞰図は駆逐されません。平板な図面になりながらも、縁の余白=はみだしを活用する ( ) 1 枚の画面のなかに四季折々の行楽を描き込む ( ) といった、いわば初三郎式が採用されています。初三郎の画業の痕跡が、現代のいくつもの名所案内に埋め込まれているといっぴよいでしょう。

きょうここに展示されているなかでもっとも新しい をみましょう (パネルでは「平成

18年」となっているが、平成19年が正しい)。これはもはや鳥瞰図ではなく、地図になっています。おそらくきょうここに展示されたもののなかで、もっとも正確な案内図でしょう。近江鉄道沿線ガイドだからといって、琵琶湖線や新幹線よりも近江鉄道が大きく描かれているわけでもありませんし、琵琶湖にピアンカもかいつぶりなども浮かんでいません。桜も紅葉も(この2つを写した写真が表<sup>おもて</sup>面にあります)、鮎も鴨もなく、スキーをするひとも泳ぐひともこの画面には登場しません。その理由はかんたんで、これが地図だからです。地図は、現実の世界を一定の縮尺で縮小した図面として、正確な位置や距離をみるものに教えます。そこに描かれた情報は特定の季節に限定されるわけではなく、また、四季折々のそれぞれのようすをみせる必要もありません(ばあいによっては、「冬季通行止め」などと文字で記されることもあります)。近江鉄道沿線をあらわすのに、上海や釜山を盛り込む必要はなく、いや、そうすることは許されないはずです。正確さを追及することで、初三郎鳥瞰図がもっていた妙というべき表現が捨てられてしまったようにみえます。

とはいえ、たとえば、ぴあ株式会社が発行した「ぴあ map」とはいくらか似ています。わたしの手元に、『ぴあ map 文庫 90』(渡辺健太編集、ぴあ株式会社発行、1990年)があります。ここには、東京と横浜のせいぜい7色刷りくらいの地図が掲載されています。この地図帳にはまた、「Culture Map of Tokyo Area」「東京体験地図」の文字が表紙と背表紙にみえます。ただの正確さを期するだけの地図ではなく、東京のカルチャーを体験するための地図だ、とこの使用目的が、あるいは地図の効能が明示されています。ですから地図も、決して不出来な平板な沿線案内リーフレットではなく、強く人びとを魅了する

威力を秘めているのかもしれませんが。それでもやはり初三郎鳥瞰図をみなれたわたしには、平凡な、ただの地図にみえてしまうのです。

*railroad* 10

初三郎の鳥瞰図に描かれていないものが、1 つあります。それは、ひとです。この会場に展示されているいくつかの名所案内には、スキーをするひと、琵琶湖で泳ぐひとが描かれています。しかし、初三郎の鳥瞰図には、いっさいひとは登場しません。その理由は、初三郎が鳥瞰図や鳥瞰絵図と呼んでいるこの図もまた、地図であるからなのでしょう。地図も初三郎鳥瞰図も、みたいところ知りたい場所を、ひとの目の能力をこえて、一望でより広く眺めてみせている点では同じです。そのうえで、初三郎鳥瞰図はというと、帝国日本国民の自覚の勧め、その自覚の表明というべき社会意識と時代性も描き込まれ、それが湾曲した世界の把握により、上海や釜山なども画面の縁に位置づけられたのです。

いまは、彼が活動したときとは、世界のようにも時代のありようも大きくかわってしまいました。凡庸にみえてしまう現在の鉄道沿線案内は、初三郎の鳥瞰図とは異なりますし、また、このグローバルと形容される時代と世界をうまくあらわしていないともいえます。初三郎の時代よりもいまはもっと、世界がわたしたちのみぢかにあるようになっています。歩いて地元を地域を知ろうとするイベントに合わせて、現代の鳥瞰図はどのように描けるのかを構想してみてもよいかもしれません。

【附記】当日ご来場の方から、近江鉄道の話聞きに来た、とのご意見をいただきました。

予告した論題「近江鉄道の時代」をめぐって「時代」のほうに重点をおいて、吉田初三郎の鳥瞰図を軸に議論を展開しました。その理由は1つに、前掲 以降の名所案内リーフレットは、初三郎鳥瞰図にくらべて情報量が少なく議論しづらかったということがあります。史料のほうに責任を負わせる逃げ口上となりますが、ご容赦ください。

また、ご質問のあった初三郎鳥瞰図の刷り部数については、たとえば、1933年の「神奈川県観光図絵」はまず12000部、ついで翌年に10000部刷られたといえます（前掲神奈川県立歴史博物館編『特別展 ようこそかながわへ』）。